

## 巻頭言



## 新しい年を迎えて

萩原 宏†



新しい年を迎えて、本学会も設立されてから 24 年目に入り、会員数も 1 万 8 千名に達する大学会に成長した。本学会が創設された頃には、我が国の計算機技術は米国にくらべて 10 年以上の後れがあるといわれていたが、20 年余りを経た今日ではその差は僅かとなり、ある面では米国を追い越して世界のトップに立っているところもある。この我が国の情報処理技術の驚異的な進歩発展は本学会の会員諸賢のご努力によって達成されたものであり、誠にご同慶の至りである。

この間の計算機技術の進歩を振り返ってみると、学会創設の頃は、計算機の世代でいえばようやく第 2 世代に入り、半導体素子を使ってハードウェアの本体を構成するようになったばかりであり、ソフトウェアもようやくコンパイラの開発が進められるようになった状況であった。それから 20 年余りを経た今日では、VLSI の技術を使ったマイクロプロセッサからスーパーコンピュータに至る多種多様なものが製作され、パーソナルコンピュータとしての小規模な利用から、大型機を設備した計算センターあるいはそれらをネットワークで結合した大規模なシステムとしての利用まで、種種の分野で幅広く利用されている。こうした利用の拡大に伴って、さまざまな応用面からの要求と、半導体技術をはじめとするいろいろな技術の進歩に支えられて、今日なお、計算機技術はハードウェア、ソフトウェアの両面にわたって文字通り日進月歩の発展を続けて止まるところをみせない。

今日までの我が国の情報処理技術は、先進諸国、特に米国の技術を模範にして、これに追い付き、追い越すことを目標にして努力することによって進歩して来た面が少なくない。しかし、米国の技術との格差が殆ど無くなった今日、日進月歩の技術の進展に後れをとらないためには、今後は独自で可能性を求めて開発を進めて行かなければならない。今日までの技術の延長線上にあるものは当面その線上での努力を続ければよ

いかも知れないが、やがてそれだけではなく新しい技術の開拓が要求されてくるであろう。また、今日までの技術では解決できない分野に対しては全く新規の開発が必要である。すなわち、これからはいろいろな面で創造的な仕事が要求されてくるのである。

最近しばしば言われるようになったが、我々の脳の働きに関して、左脳は言語的、論理的な働きを分担し、右脳は視覚的、直観的な働きを分担していると考えられている。すなわち、左脳はデジタル的な情報の処理を、右脳はアナログ的な情報の処理を司っていると言えることができる。

創造的な仕事をするには、直観的なひらめきが重要な役割を担っていることは明らかである。直観的な働きは右脳の分担するところであるので、創造的な能力を高めるには右脳の活動を盛んにすることが必要である。我々情報処理技術に関係する者は、日常は専らデジタル的な情報の取扱いに終始して、論理的な思考を行っているのだから、左脳の活動が中心になっているものと思われる。直観的なひらめきを要する創造的な仕事をするためには、我々は右脳の働きを活発にさせるように特に注意を払わなければならない。

右脳の分担する働きに関連するものとしては、文学や音楽、絵画、彫刻、工芸等さまざまな芸術をはじめとするアナログ的な文化活動があげられる。このような文化活動は我々の日常かかわっている仕事とは異質な、全く対照的なものである。

日常多忙な本学会の諸賢には、仕事と直接関係の薄いこのようなことに時間をとるのは難しいことも知れないが、余暇にはつとめて、デジタルな論理的思考からはなれたアナログ的な文化活動を行うことが望ましいのではあるまいか。情緒豊かな精神文化をはぐくんで、左右の脳のバランスのとれた精神活動を営むと共に、創造的な能力を高めて、技術の進展に寄与されることを期待したい。

† 本会副会長 京都大学工学部情報工学教室

(昭和 57 年 11 月 25 日)

